

てんぐさま(鳥井町)



いました。

ある日、

「今日は、仕事がはようにすんだので、お酒を

ぱいのんで行つとくんはないの。」

と、おじよりさん(奥さん)に言われて、余作じ

いさんは喜んでお酒をおよばれました。およ

ばれているうちに、帰りが大変おそくなってし

まいました。

あくる日、余作じいさんは、いつもより朝はよ

むかし、むかし

鳥井に住んでいた

余作じいさんは、

若いときから庄屋

さんへ、毎日蚕の

世話をしに行つて

うに庄屋さんのところへとんで来ました。

そして、

「夜んべは、えらいおよばれて、ありがとうございます

んでござんした。」

というお礼もそこに、話し出しました。

「だんなはん、だんなはん、ちよつと聞いておく

んはないの、夜んべは、びつくりしてもうて

こしが抜けるかと思えんしたんにや。」

「十二時すぎていたからのう、何があつたんかい

」の。

余作じいさんは、あおざめた顔で話しを続けます。

「およばれたいい気分、お宮さんの前を通れ

んしたら、まっ暗やみの境内に、白い着物を着

たお神主さんのような人が、高い高い下駄をは

き、はさみ箱をかついで、石だんを、しずかに

上つて行くんですつて。

もう、おとろしやら、気味が悪いやらで、走つ

て帰れんしたんにや。」

「それはこわかったのう、きつと、てんぐさんではなかつたかの。」

余作よさくじいさんも、

「さようでごぜんす。わしも、てんぐさんではなかつたかと思えんしたんですつて。」

そばで、お茶ちやを入れていたおじよりんさんは、

「そうそう、わたしも子どもこのころ てんぐさんに連れて行いかれた女おんなの子こを思おもい出だしたわの。」

お宮みやさんの夜祭よまつりりやつたかの。仲なかのいいつれ（友ともだち）とあすんでいたら一人ひとりの子こが、ちよつと待まつてと言いつて、いけい（大おほきい）杉すぎの木きのかけへ用もちたし（小便せうべん）に行いつたきり、もどつてこんかつての。あつちや、こ探たづちやと一晩中ひとよじゅうさがしたけど見みつからんかつての。朝あまになつたら遠とほくはなれたすすき原はらで、ぼるぼるの着物きものすがたで見みつかつての。これはてんぐさんが連れつれて歩あいたにちがいないつて、うわさでしての。あんまり、おそうなつてから外そとには出でんぼうが



よござんすね。」

「はい、わたしも、そう思おもえんす。」

余作よさくじいさんは、胸むねをなでおろしながら言いいました。

それから、明あるいうちに帰かえるようと、親おやから言いわれても、なかなか帰かえるつとしなかつた子どもたちも、どんなに楽たのしく遊あそんでいても、夕ゆ方にゆうがたなると、三々五々さんさんごご家いえへ帰かえつて行くようになったそうです。